

が居り、それがその地方の人々に憑き祟つて、様々の奇瑞を示した。そこで浦人はこれを恐れ、神として崇め祭つた所、國土が大に豊かになつた。大に荒れる神と書いて、大荒大明神と名を呼んだ。この神は現在までも靈驗のあらたかな神である。この神の本地は毘沙門天王である。聖德太子が逆臣守屋を御退治になられた時も、彼の河勝の神通力の方便にかかつて、守屋は討たれたのだといふ話である。

〔語釋〕○みどり子——孩の字をあてる。嬰兒、幼兒の意。○ふり人——天下つた人間。○始皇のさんなん——三男と考へるよりも再誕と考へる方が、傳説的興味が多いやうである。○橋の内裏——多分大和の高市郡高市村橋の土地にある内裏の意であらうが、この土地に皇居はなかつたやうである。傳説だから、強ひて事實に拘泥する要もなからう。○日よみ——こよみ、曆の意。○うつほ船——木をくりぬいて作つた船、小船といふほどの意。○大荒大明神——播磨の赤穂郡坂越郷にあるので、大酒神社と稱せられて居る。大勢、大荒なども書くが、大酒が良いであらうと吉田東伍博士はのべて居られる。秦氏の祖神としてゐる。神社考には、この花傳書と同様な傳説をのせてゐる。この神社は、秦酒公と何かの關係がありはしまいかと考へられるが、わからない。

一、平の都にしては、村上天皇の御宇に、昔の上宮太子の御筆の申樂延年の記を叡覽なるに、先、神代佛在所のはじまり、月旨、晨旦、日域に傳るさやうげんきよをもて、讚佛轉法輪の因縁をまもり、魔縁を退ぞげ、福祐をまねく、申樂舞を奏すれば、國おたやかに民しづかに、壽命

長遠也と、太子の御筆あらたなるに、村上天皇、申樂をもて天下の御祈禱可爲とて、その比、彼河勝より、此申樂の藝を傳る子孫、秦氏安あり。六十六番申樂を紫宸殿にて仕。其比、紀のこの守と申人、才智の人なりけり。是はかの氏安が妹むこ也。これもあひともなひて申樂をす。其後、六十六番までは一日につとめがたしとて、其中を選んで、稻積の翁(翁面)、代繼翁(三番申樂)、父助、これ三をさたむ。いまの代の式三番是なり。則、法報應の三身の如來をかたどり奉所なり。しき三番の口傳、別紙にあるべし。秦氏安より光太郎金春まで、廿九代の遠孫なり。これ大和國圓滿井の座也。をなじく氏安より相傳たる、聖德太子の御作の鬼面、春日の御神影、佛舍利、是三、この家に傳る所也。

〔考異〕(一)平の都——宗節本、平の城。(二)叡覽なるに——宗節本、叡覽あるに。(三)月旨——宗節本、月氏。(四)子孫——宗節本、遠孫。(五)父助——宗節本、父助に「子、ノセウ」と振假名あり。(六)光太郎金春——宗節本、金春の傍に「當代(原註)」とあり。(七)遠孫——宗節本、嗣孫。(八)御作——宗節本、この傍に「河勝面也(原註)」とあり。

〔口譯〕平安京に於ては、村上天皇の御代に、天皇が昔の聖德太子の御書き遊ばされた申樂延年の記を御覽に